

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 62, 2022. 3

\*\*\*\*\*

総合博物館 2021 年度研究報告会がオンラインで開催-----	在田 一則	1
伊福部昭のサクラ -----	加藤 康子	2
宮戸島を桜の島に～ヤマザクラ 2011 プロジェクト～ -----	鈴木 三男	4
追悼 細川音治さん（植物ボランティア） -----	佐藤 広行	5
ゆかいな三人組—研究支援推進室— -----	渡邊 洋子	6
ハチ公は忘れない -----	久末 進一	8

## 報 告

### 総合博物館2021年度研究報告会がオンラインで開催

会長 在田 一則

ボランティアの皆さん

お元気でお過ごしでしょうか。

3月15日に総合博物館2021年度研究報告会が行われました。「まん延防止等措置」のため、オンラインで行いましたので、参加できなかった方もおられたのではないのでしょうか。

報告会では、最初に小澤丈夫館長のご挨拶があり、そのあと表彰を受けられる方（5年表彰14名、10年表彰8名）の紹介がありました。表彰式は後日館長室で行うとのこと。小林快次研究部長による全体報告につづいて、九州大学に移られた山本順司さんの後任として3月に栃木県立博物館から赴任された北野一平先生のご挨拶とご自身の研究の紹介がありました。南極などの変成岩岩石学・年代学の研究をされておられます。『日本地質学会 News』2月号に北野さんの記事「栃木県立博物館で学ぶ地学」があり、同館での地学の普及教育活動を紹介しています。着任を機に地学ボランティアを立ち上げられるとのこと。参加希望者は北野先生にご連絡ください。研究部（江田真毅先生）と資料部（坪田敏男先生）の活動報告があり、資料部研究員の新井田清信先生からはアポイ岳かんらん岩の年代の報告がありました。学生・院生研究発表として、理学院博物館教育学研究室に所属する谷口加奈子さんから修士研究

「外出困難者に向けたオンラインプラネタリウムの意義と課題」についてお話があり、つづいて、私からボランティアの会会長として以下の趣旨のご挨拶と報告を行いました。

ボランティアの会は毎年5月最後の金曜日に総会を行ってきましたが、2019年5月24日に総合博物館「知の交流コーナー」で開催した第17回総会および講演会を最後に総会を開催していません。総会では、ボランティアの会の主たる活動である「ボランティア ニュース発行」や「ボランティア談話会」、「博物館へ押しかけよう会」の報告、また各グループの活動報告などがあり、総会の後は懇親会で交流を深めているのですが、この2年にわたってその機会が失われ、たいへん残念です。

ボランティア ニュースは三密を避けて少人数で制作出来るので発行を続けていますが、総合博物館でそれを見てくださる市民の方がほとんどいなくて、いささか力が入らない状況です。

今年こそ総会を開催し、2020年2月に予定しコロナで中止となった「小樽総合博物館運河館へ押しかけよう会」を実現し、再活動したいものです。

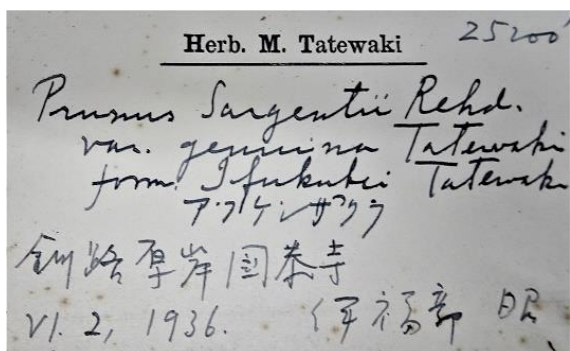
コロナ君も態勢を立て直しつつ機をうかがっているようですが、めげずに健やかに過ごしてください。

伊福部 昭のサクラ

植物ボランティア 加藤康子

昨年の1月、博物館の植物標本のバラ科・サクラ属の整理をしていたら、古い標本のラベルの採取者に「伊福部 昭」という名を見つけ、驚いた。

釧路厚岸<sup>こくたいし</sup>国泰寺にて、1936年6月2日に採取したとある。



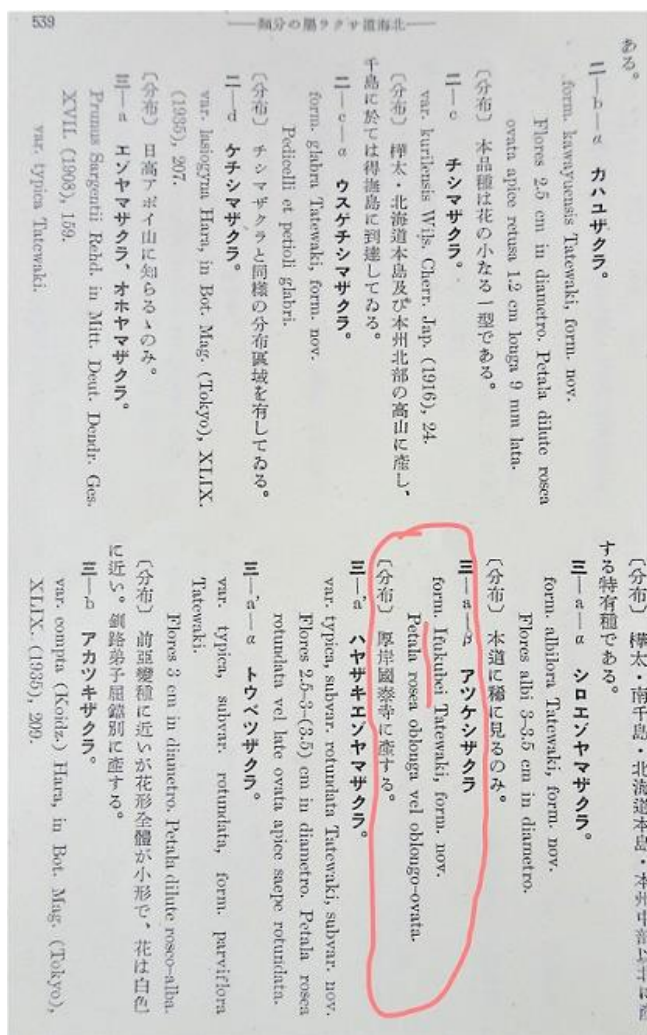
調べてみると、やはりかの有名な作曲家・伊福部昭さんの標本だった。伊福部さんは1935年に北大農学部林学実科を卒業し、皇室林野局森林官として1940年まで厚岸森林事務所に勤めていた。

植物標本庫にたまたまいらしていた佐藤広行さ

ん(北大総合博物館／九州大学)が、農学部の図書館に行き、関連する文献をコピーしてきてくれた。

1936年、北大農学部の館脇操博士は北海道各地の林務官の協力のもと北海道のサクラ属の調査を行ない、北海道林業会報 34 卷 11 号に「北海道サクラ属の分類」として報告している。伊福部さんはこの調査のために標本を採取したのだ。館脇博士はの中で 30 種のサクラを列挙し、伊福部さんが採取したサクラは新種として「アツケシザクラ」、学名 *Prunus sargentii* var. *typica* form. *ifukubei* と命名された。

学名に伊福部さんの名前がつけられたのである。



ボランティアでいらしている道総研林業試験場の新田紀敏さんに伺うと、「伊福部さんは僕らの大先輩だよ」とおっしゃる。

また、伊福部さんは北大在学中、文武会管弦楽団(のちに北大交響楽団に統合)のコンサートマスターを務めていたが、同交響楽団のOGは「同窓会の名簿に載っているよ」と教えてくれた。

世界的な作曲家、伊福部 昭さんは意外にも身近なところにいらしたのだ。

では、いつから音楽家となられたのか?

私は伊福部さんのことを知るために札幌市中央図書館に通い、著作やCDを繰り返し借りてきた。

彼は子供時代を過ごした音更村(当時)でアイヌの人々と親しみ、その伝統音楽にも触れてきた。独学でバイオリンとギターを習得し、作曲も始めたそうである。

北大在学中は、有志との室内楽演奏会で海外の作曲家の作品の日本初演も度々行っている。

厚岸の森林事務所時代に作曲した管弦楽曲「日本狂詩曲」はパリのチェレプニン作曲コンクールにおいて第1位となり、1936年、ボストンにおいてフェビアン・セビツキー指揮、ピープルズ交響管弦楽団により初演された。

彼は独学で音楽を学び、演奏、作曲したが、その眼は常に世界に向けられていた。林務官の仕事をしながら、作曲にも打ち込んでいたわけだが、木に親しむ生活が彼の音楽の創作意欲をかきたてていたようにも思う。

戦後、林業試験場の職を辞し、体調を崩したことから音楽の道に専念することになったそうだ。その後の活躍は目覚ましく、私ごときがここに書き連ねることははばかれる。知れば知るほど凄い方だ。ゴジラをはじめとする映画音楽を多数作曲、映画界に多大な影響を及ぼした一方で、様々な形態の曲を作り、音楽の研究をし、東京芸術大学や東京音楽大学で教鞭をとり、多くの音楽家を育てた。

その中で私が特に関心を持ったのは、東京音楽大学に民俗音楽研究所を設立したことだ。伊福部さんが故郷の北海道でアイヌ民族の音楽に多大な

影響を受けたことから、アイヌ音楽の研究を主たる目的として出発し、のちにアジア地域における民族音楽にまで研究範囲を広げている。

民族楽器について研究した著作を読んだが、それは彼の科学者 Scientist としての洞察力に富んでいる。楽器を熟知し、二十五絃箏やリュートのための曲も作っている。

図書館でギターとリュートの作品集のCDを借りてきた。じっくりと聴いていると、彼の作り出す音楽は、やはり北海道の大地に深く根差したものであると思う。ギター曲のなかにサクラのメロディーがでてきた。

そういえば、伊福部さんの「アツケシザクラ」はどうなったのか?

採取地の国泰寺は蝦夷三官寺(江戸幕府が1804年に伊達・様似・厚岸に建立した寺)のひとつ。厚岸町のホームページによると国泰寺の桜の古木は「天保元年(1830)、アツケシ場所請負人山田文右衛門が奥州石巻から移植したと伝えられる」とあった。北海道では移住してきた人たちが故郷のサクラを持ち込むケースが見られる。「アツケシザクラ」も本州から持ち込まれたものに由来するのかもしれない。

分類上、サクラの日本国内の自生種として認められているのはわずかに10種。自生種以外では野生種の交雑、園芸品種の夥しい数のサクラの品種が存在する。

「アツケシザクラ」はオオヤマザクラ(*Cerasus sargentii*)の変異に含まれると考えられ、和名も学名も今は使われることはない。

さて、伊福部さんの標本をあらためてよく見ると、花が大きく色も濃くきれいなサクラだ。6月2日に採取したとあるが、花が咲いている時季にぜひ見に行きたいものである。

## 宮戸島を桜の島に～ヤマザクラ 2011 プロジェクト～

奥松島復興の会 鈴木 三男

**なぜ宮戸島なのか？** <sup>みやとしま</sup>宮戸島（宮城県東松島市）は日本三景の一つ、松島の最大の島で、最高点の大高森(標高 106m)からは松島湾を一望できます。この島には縄文時代の里浜貝塚があり、私たちはそこにある奥松島縄文村歴史資料館を拠点に歴史、文化、自然を巡るさまざまな活動を展開してきました。そんな状況を一変させたのが 2011 年の大震災です。島に 4 つあった集落のうち太平洋に面した 3 つがほぼ壊滅しました。

**さまざまなかたちの復興支援** 震災後、島には非常に多くの方々、団体などからの支援が入りました。そして時間の経過とともに直接的な支援から復旧・復興の支援へと力点が変わっていきました。特に目立ったのは津波で一木一草も無くなってしまった被災地への植樹で、松、桜をはじめありとあらゆる樹木が、そこら中にさまざまなイベントを伴って植栽されました。ですがこうした活動は震災三年目を迎える頃にはほとんど無くなったようです。植栽された苗にその後のケアがなされたという話は聞きませんでした。植えた苗は夏草に覆われ、そして消えていきました。

私たちの活動の始まりは縄文村歴史資料館が被災して出来なくなったイベントの肩代わりでした。牡蠣の養殖体験、鹿角の縄文 <sup>つりばり</sup> 鉤での釣り体験、蕎麦の栽培と蕎麦打ちなどで、これらのイベントは地元の方々との協働作業でした。島外の人たちに被災地を見てもらい、復興への理解と支援を呼び込むのが目的でした。こうした活動の中から「ヤマザクラ 2011 本プロジェクト」が発足したのです。

**なぜヤマザクラなのか？** 江戸時代に作出された園芸種であるソメイヨシノが全国を席卷している現在の状況ですが、それ以前はそれぞれ「在地」の桜が愛でられました。万葉集、百人一首の時代から愛されてきたのはヤマザクラです。この桜は西日本に分布の中心があり、東北地方の太平洋側

では松島のあたりが北限地なのです。宮戸島には在来のヤマザクラとカスミザクラ、それに近世以降に薪炭材用に導入されたオオシマザクラの 3 種があります。実はこのオオシマザクラが入ったことによりこれを介して 3 種間で雑種が出来てしまい、北限地から「純系のヤマザクラ」が消えようとしているのです。震災で自然植生がなくなってしまった土地や災害復興で開発されて出来た無植生地は帰化植物の楽園となりつつあります。そういったところにヤマザクラを植えて種の保全をするとともに、島を「松と（江戸時代以前の）桜の島」として名勝の景観を復活させようというものです。目標は 2011 本。このプロジェクトで最も大切なのは、その過程です。まず、島内のヤマザクラから実を収穫し、たねを蒔くことから始めました（植樹え祭）。芽生えた苗はポットで育苗して 3 年目に史跡公園内の苗畑に植えます（苗植え祭）。ここで育てて 4 年後に島内各所に植樹します（植樹祭）。こうしたイベントは島外と地元の参加者によってなされ、そこに交流が生まれます。遠来の人は民宿に合宿し、そこでは地元の人も参加した懇親会が開かれます。毎年継続して開催することにより小学生だった子が高校生になり大人顔負けの腕力で苗を植える穴を掘ってくれるなど、みんなの生活と成長に合わせて活動は続いています。この地元とのつながりと継続性がプロジェクトの一番の宝です。みなさんは満開の桜と緑の松の島を夢見てプロジェクトは今も続いています。



植樹祭の初めての開花！ 拍手！

## 追悼

## 追悼 細川音治さん（植物ボランティア）

資料部研究員 佐藤広行

2022年1月27日、長らく北海道大学総合博物館の植物ボランティアとして活動された細川音治氏（享年85歳）が御逝去されました。細川氏の略歴を紹介しつつ、追悼文としたいと思います。

細川音治氏は1936年（昭和11）年に弟子屈村（現：弟子屈町）に生まれ、国立弟子屈町病院や地元の民間病院で43年間、医療事務の業務に携わる一方、環境省自然公園指導員、弟子屈町史編纂委員、北海道教育大学釧路校の非常勤講師などを歴任。てしかが自然史研究会、てしかが郷土研究会の代表を設立当初から務められた。晩年も環境省絶滅危惧種調査委員として道内の植物調査に活躍されました。

1952年の夏、仕事で移動中に眼前に広がる摩周ブルーとも称される澄んだ藍色の湖を目にして以来、摩周湖に魅せられ、仕事のかたわら地元の自然保護活動を主導し、1992年に環境庁自然局長賞、1994年に阿寒前田一步園賞、2006年に環境大臣賞を受賞、2008年に藍綬褒章（自然保護功績）を受け、2009年には弟子屈町文化賞を受けられた。

1990年に北海道大学の植物園園長であった辻井達一教授の協力を得て、長年の植物観察の記録をまとめた図書『阿寒・摩周の植物』（北海道新聞社刊）を刊行された。

郷土の花の名前が知りたくて1970年頃から写真と植物の採集をしながら押し花作りを始め、専門書や図鑑も限られ、名前を調べることに大変な苦労をするなか、新聞で『牧野新日本植物図鑑』の発売を知り、待望の一冊を購入。御縁があり原寛教授（東京大学）とともに北海道調査に同行し、辻井達一先生などの協力を得ながら自然観察・標本作りを継続されてきた。

都合により弟子屈町を離れ札幌に移住、後に石狩市に独り住まいを構える。2013年には石狩市の緑地帯で日本一とも評されるオオバナノエンレイソウの大群落を発見し新聞紙面を飾ったこともあった。

道東のひとり植物調査で縁のあった高橋英樹教授（現北海道大学名誉教授）を頼り、長年採り溜めた

植物標本を北海道大学総合博物館に寄贈。2015年には周囲の誘いもあり、北大総合博物館の植物ボランティアとして活動を始められる。2018年には弟子屈町教育委員会からの委託を受け、資料部研究員の佐藤とともに植物調査を実施している。

弟子屈町教育委員会から講演依頼を受けるも2019年は体調不良のため、2020・2021年はコロナ禍のため実現しなかったが、細川氏が使用していたパソコンの中には、余力を尽くし作成された地元への想いがこもった講演資料が用意されていた。

残念ながら立て続けに病に伏し、徐々に体からはかつての活力は失われていったが、晩年まで望郷の思いに駆られ、その胸には力強く郷里の豊かな自然に対する想いに満ち、周囲の人たちに愛され、穏やかに力尽きるようにその生涯を閉じられた。

「もし明日という日が有るとすれば、感謝の一日であり大切に生きて行きたい。朝起きて目が覚めると、それは新しい日で、おまけの一日と思っています。遠くない或る日に…

ありがとうの言葉しかないが、声で語れず。ある日、さようならが来ます。そして遠からず時間が過ぎると誰からも忘れられて消えてゆく…  
もしかして暫くの間は石に刻まれ私の名前を思い出してくれる人が居てくれるのかもしれない。人はみな、解らない、分からない。空の雲のように」



植物ボランティア控室 左端は細川さん、右端は筆者 5

## ゆかいな三人組－研究支援推進室－

研究支援推進員 渡邊 洋子

中庭に面した日当たりの良い一室。西向きの高窓からは、古びたスクラッチタイルの外壁を額縁にして桜と梅の立派な枝ぶりを見下ろせる。そう、ここは2階なのだ。春には一面に淡いピンクに透ける花が雲のようにこの中庭を埋め尽くし、初夏の梅の実のなる頃には爽やかな緑の葉が燦燦と陽に照らされていた。

この中庭で耳をすませば、毎日聞こえてくる笑い声に気づく人もいるだろう。二階の研究支援推進室では何かしらの業務が発生するたびに会話が生まれ、笑い合う。お互いを励ましているのか、慰めているのか、そんな和やかな掛け合いが聞こえてくる。研究支援推進員の渡邊と市來だ。それぞれ昨年4月と6月に着任したばかりで、どこに何があるのか、果たして自分の業務が何なのかの確証も得られないままドタバタ劇のように時間を過ごす日々。時々、2年先輩の技術補助員 柴野さんが二人に話題を振ったり、対応に苦慮したりしながら優しく急かさずアシストしている。

昨年4月に渡邊が着任した時、先輩の澤出さんの退職が決まっており、2か月後には私が次なる新人に引き継ぎ作業をしなくてはならないなど思ってもいなかった。6月早々に後輩として市來さんが着任すると、私自身もわかっちゃいないマニュアルを振りかざして夏の企画展の準備が始まった。

長身ロングヘアーの市來さんは楚々として知的。いかにも「事務職」が得意そうな雰囲気纏ったドレッシーなブラウスの似合う女性だ。そんな第一印象と本来の彼女が少し違うかも、と最初に気づいたのは机の上のメモ帳を見た時だ。赤塚不二夫の「うなぎいぬ」のメモ帳を彼女は愛用していた。

市來さんと渡邊は二人とも札幌出身で、年齢も1年しか違わない。札幌の私大で考古学を専攻していた市來さんは施設管理・運営系職業のキャリアウーマンだった。図書館勤務経験もある。そんな経歴からは窺い知れないが、実は無類のジェットコースタ

ーマニアで、怪談好き。戦慄することに耐性があるのだろう。近代戦争史、もっと言うならナチスドイツ・アウシュビッツ関連に詳しく、好きな番組はNHKの「映像の世紀」だ。かわいいトイプードルの親子を2匹飼っている。



市來紗都子さんの飼い犬トイプードルのももたろう

一方、渡邊は4人の子供を持つ「母ちゃん」である。美術系の学歴を経て漆絵作家、保育園運営、給食のおばちゃん、お絵描き教室の先生、看板・ちらしデザイン、イラスト制作、イベント・展覧会企画運営、絵本製作、専門学校教員、雑貨制作販売、通訳（ベトナム語）、美術館学芸員などなど節操のない職歴を掲げてここに流れ着いた。前職の小樽の私設（企業）美術館では近代イギリスステンドグラスとアールヌーヴォー、という非常にニッチな分野を担当していた。大学生時代には趣味で19世紀～20世紀初頭のベトナム建築の研究をしており、またここ13年間は小樽市民として明治以降～昭和・平成の小樽市発展と斜陽時代の栄枯盛衰の歴史が好きなことを鑑みると、「19世紀～20世紀の時代の変革と変遷」が自分のテーマとも言える。もともと、この職場を志望した動機は動物標本製作や、動物標本を使った環境・生物の教育に関心があるからで、着任早々緊急事態宣言が出て博物館が休館していた時には、シロクマ剥製の破れた部分を補修する仕事をさせても

らった。芸術家の夫はベトナム人で、昨11月に2年ぶりに母国へ帰省した折、オミクロン株の流行を受けて日本への入国が原則禁止になってしまった。渡邊は文字通りワンオペで育児・家事・家計を担い中なのである。



いしかりサイエンスフェスでえぞホネ団 Sapporo 団員として骨格標本について説明する渡邊

そんな特殊な二人が北大総合博物館で出会った。共通点は「近代史」。性格面では自分に正直で楽観的なところが共通している。

“近代”という、思想もテクノロジーも政治も芸術文化も激動の時代に、人間が何をして、どう生きてきたのか…そんなことに興味がある私たちには、根底に「何があっても生きていける」という強い確信があるのかもしれない。その前向きな精神は、たとえ「出勤」を「失禁」、と打ち間違えたり、「推進員」を「水死ん員」に変換ミスしたり、先生方の名前を間違え続けたりしてもへこたれることはない。旺盛な好奇心と探求心は、朝開館前に出勤したときに「もしかしたらもう開いてるかも」、と近道である正面玄関からの入構を何度もチャレンジするエネルギーになっているし、開かずの扉を開けて往年の遺物を発見してしまい、廃棄物集積場にカビの生えた大量のゴザを運んだりする業務の原動力になっている。

「過去の土台の上に自分たちが在ることを知り、次なる時代を活発に生きていく」「人は歴史の文脈の中で存在し、個人は時と空間を問わず他者との関係性の中で認識されている」そんな肌感覚がある私たち二人が北大総合博物館で一緒に勤務することは必然だったのかもしれない。

推進室のタスクは多岐にわたる。新型コロナウイルスの流行をきっかけに多くの業務が整理され、中断・中止しているらしいが、それでも別社会から転職してきた我々には戸惑うことも多い。中長期的な管理運営業務、短期的に集中力が必要な業務、根気と寛容性が必要な対人スキル、そして何より溢れる業務を軽やかに受け流す「捌き力」と業務量の緩急への「対応力」など、求められる技術や精神力の幅も深さも様々だ。

日々様々な業務に直面するたび、歴代の推進員たちに敬意を払い、その忍耐力、さらに言うところ「察して動く」「一旦受け止め飲み込む」「丁寧に粘り強く」といった精神に驚嘆している。…私たち二人にこの精神が宿る日は果たして来るのだろうか…?

そんな不安を払拭してくれる存在が推進室にいる。2年先輩である技術補助員の柴野さんだ。柴野さんは「ちょうど自分も気になっていたから」「時間をつぶしたかったからちょうど良かったよ」「別に気にしないで、やりたくてやってるんだから」と言いながら業務を代わりにやってくれたりサポートしてくれたりする。

今日も「ご応募ありがとうございます」を「ご横暴ありがとうございます」と打ち間違えて大爆笑している私たちを優しいまなざしでにこやかに眺めながら、柴野さんは推進室の必要な物品購入の手続きを進めてくれている。

窓の外には雪が舞い、中庭の梅は硬い樹皮に覆われている。例年より長かった秋に一度は膨らみかけた桜のつぼみも今は静かに綿帽子をかぶって凍えている。

北大総合博物館の業務を広く担う研究支援推進員も、コロナ禍というイレギュラーな状況の中、2名とも新人という局面を迎えた。連綿と受け継がれてきた博物館の良い面を踏襲しつつ、新しい形での対応が必要になってくるのも事実だ。春がめぐればその分、我々の経験値も1年積み重なる。毎日前向きに、私たちらしく笑い合いながら刻まれていく推進室の新たな歴史を、皆さんには楽しみに見守っていただきたい。

至らぬところばかりではございますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## ハチ公は忘れない

図書ボランティア 久末進一

植物の押し葉用古新聞の「東京日日新聞」(昭和7年10月15日付)の記事に「新宿改造計画」があった。当時の内務省都市計画課による関東大震災(1923(大正12)年9月1日)後の東京復興策で、銀座の次は人口集中いちじるしい新宿を駅中心に交通路整理と広場新設で大改造するという計画である。続いて渋谷、池袋と副都心を増やし、統合して大東京とする災害復興構想だったことがわかる。

その渋谷駅頭に忠犬ハチ公の銅像が建ったのが昭和9(1934)年4月21日。「東京朝日新聞」(発行日不詳)には、主人の急死を知らず、渋谷駅で別れたまま帰らない主人を、もう9年も待ち続ける老衰した秋田犬ハチ公のために、まだ元気うちに銅像を残してやろうという計画への賛同記事が載っている。感動実話はマスコミを通じて全国民に知られるところとなっていた。

紙面には、「銅像建設事務所のある渋谷駅長室には全国から百余通の嘆願書や浄財が寄せられているが、或る少女は『ハチ公をなでていたら男の子が宿無し犬と言ってけとばしました。かわいそうで涙が出ました。だからハチ公が活着ているうちに銅像を建ててやってください。そうすれば、この像はこの犬だとわかっていじわるっ子でもなでていくといいます』と訴えている。」(概要)そんな思いが銅像にまで結実しただけでなく、いまやスクランブル交差点と駅前広場出現に至り、東京の

顔になったから、ハチ公人気は凄い。

今から88年も昔のこの銅像(安藤 照 製作)は、戦時下の金属供出で消え、今は二代目(1948(昭和23)年、安藤 士 復元製作)という。

最近の海外ネット情報にもハチ公がいた。

ギリシャの地方都市での実話。自動車事故で運転者の男性が死亡する。その人が飼っていた犬が、主人の臭いを追って事故現場まで嗅ぎ当て、その道端で主人を待ち続ける。

雨や嵐でも現場を離れず居座り続ける姿が話題になり、人々の涙を誘って近くの住民が犬小屋を作ってやる。誰かが餌を与えるなどして、この犬はその場所で1年半も待った。

だが、ある日、犬の姿が消え、大騒ぎ。皆で捜索すると犬小屋の中から手紙が出てきた。

「この犬の面倒は私たちがしっかり見ます」

車で立ち寄った夫婦が、いじらしい犬を見かねて自宅に連れ帰って育てていたのだ。

犬がいた事故現場には十字架がたてられた。

昔も今も、情愛には情愛で応えようとする人と犬の心に流れる絆きずなに変わりはない。

コロナ禍で世界感染者5億人超え(WHO発表)という。急な入院の意味を知らず。病院の玄関先で戻らぬ人をいつまでも待っているハチ公の仲間が世界中に増えている。

### 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No.62

- ◆編集人：北海道大学総合博物館 ボランティアの会(編集委員：星野、今井、久末、山岸)
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2022年3月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。  
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>